ISSN 0915－6925

大学アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

1997. 9. 26 No.17

Eastern Japan Section, Association of College and University Archives of Japan

目　次

- 「大学史の広がり」を考えて …… 鈴木　秀幸 …… 1
- 北米の市立文書館を見て …… 細井　守 …… 4
- 全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿 …… 6
- 全国大学史資料協議会1997年度総会案内 …… 8
- 東日本部会1997年度総会議事録(抄) …… 9
- 東日本部会幹事会議事録(抄) …… 9
- 東日本部会研究部会記録(抄) …… 9
- ミニ情報 …… 10

1997年3月11日(火)　研究部会

「大学史の広がり」を考えて

明治大学歴史編纂事務室　鈴　木　秀　幸

本企画の意味

本協議会東日本部会は1988年6月の関東地区大学史連絡協議会設立以来、10年の歴史を迎えようとしている。よく言われることではあるが、10年という期間は一区切りである。この間の歩みを軽々には総括できないが、やはり俗な言い方をすれば「這い上がってきた」、今少し気の利いた表現をすれば「組織の拡大に努めてきた」ということになろう。と、まとめるといかにも尤もらしく聞こえるが、関係者の労苦は筆舌しがたいものであったろうし、また事実そのようであった。知名度の低い「大学史」(それまでもいくつかの先行研究はあったが)、しかも研究、編纂、展示と三つの立場・分野にあったものが同じ共通の場を設け、協力してことに当たろうとしてきたわけである。会務の運営上、最も適切と思われたのは着実に組織や規模を拡大してきたことであろう。機に乗じて事を急(せ)いたり、会員獲得に狂奔したわけではない。あくまでも大学史料の収集・保存・利用を共通項に各々の学校・個人らの実情に合わせて拡大に努めてきた。

とはいえ自己の殻に籠もるわけではなかった。当然、周辺には多くの関係団体があり、また研究者がいる。したがって、学ぶべきことは大いに得ようとした。その姿勢は例えば年に数回催される研究会(おもに見学会)や

講演会等にあらわされている。いわばこの10年間は組織・規模の拡大と研修の時代と極論してよいであろう。

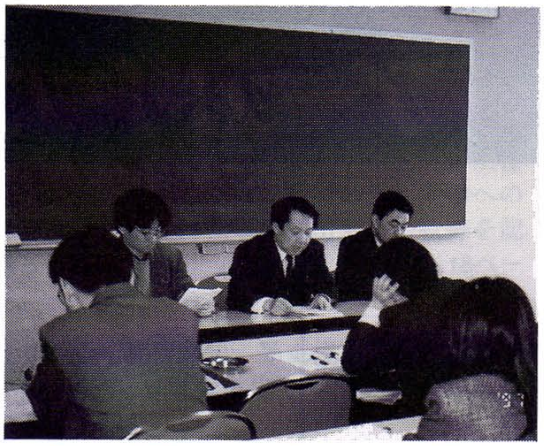
ところで、正直なところ「大学史」は市民権を得たとするか、いやもう少しとするかといった段階であろう。前記したとおり、本会の組織は拡大した（それは単なる会員の数的な拡大ではなかったとしても）。しかし、本会を決定的にあらしめるためには組織拡大以外の指標も求められよう（組織拡大化は続行すべきである）。それは「大学史」自体の質的、いわば内容面の充実であろう。そのためには他から学びとるだけではなく、目標を自ら見出し、自ら達成していかなければならないであろう。「自力更生」、「自分のことば」。とりわけこの思いを強くしたのは昨年の全国大学史資料協議会（東西合併記念大会）における各学校の報告を聞いた時であった。年史編纂における校内連携の実情、学内類似施設との関連あるいは所属の模索等々。研究、編纂、展示のそれぞれを本務とする、その領域で鋭意努力しているさまが窺えるとともに苦悩のようすが強く印象に残った。もちろん、自らの職務遂行は第一である。しかし、従来はこれで良しとする傾向にあったことも否めない。例えば編纂事業であれと、刊行が終わればそれで終止符を打つか、ひたすら次の編纂まで待つ状態であった。編纂にしても、何にしても今までの努力と問題点をさらけ出し、自らのものにしていく必要を痛切に感じた。

そこで、不遜ながら本協議会東日本部会に「大学史の広がり」というテーマによる「自らの研修会」を提案した。すなわち３つの河川（研究・編纂・展示）をまとめる河川管理組合（全国大学史資料協議会）で「大学史の広がり」を展望すべく、泥臭くとも「自分のことば」で、かつ「目線を同じくして」語り合いたいということである。

おかげさまでその提案は認められ、日取り・場所も３月11日、中央大学駿河台記念館とされた。

各大学の実践

この場合の「大学史の広がり」とは事業・業務の側面に限定した。いうならば学内への広がり（請け負い、連携）、学外への広がり（協力、連帯）、さらに他の分野への広がり（例えば情報部門との協同）といったものをさす。



報告者・桑尾氏（左）、鈴木氏（中央）、三浦氏（右）

当日、東洋大学井上円了記念学術センターの三浦節夫氏は同センター設置規則に基づき、現在どのような活動をしているか、ということを報告された。大約すれば、日頃の創立者および東洋大学史関係の調査・研究を(1)出版（研究誌、広報誌、資料集。さらには『東洋大学百年史』普及版刊行を検討中）、(2)シンポジウム、講演会、セミナー、(3)展示、(4)講師派遣の形で生かしている、ということであった。これらのワイドな活動ぶりは普段『井上円了センター年報』、とくに同誌掲載「センター日誌」等で注目していたが、やはり圧倒されるものがあった。そして、最後に大学の歴史を素材としつつも、現代的な視点からさまざまに活動することが必要であると結んだ。

次の学習院大学五十年史編纂室の桑尾光太郎氏は目下、年史編纂が主務であるとことわりつつも、同室が所属する史料館では学内に対しては研究、展示、教育に寄与するようにつとめており、さらに学外に向けても教育活動に力をいれていると述べた。そして、当日は一事例として文学部に開設した総合基礎講座「記録保存と現代」、とくにその中の「大学アーカイブズ」、「学習院大学史」等について紹介があった。そして、こうしたことは同館・同室の認知度を高めることになっていると締めくくった。聴講中、同氏の報告があの歴史を感じさせる瀟洒（しょうしゃ）な史料館から発せられているような錯覚に陥った。

明治大学歴史編纂事務室の事例報告は筆者が行った。百年史編纂後の主務について、(1)史料の収集・保存、(2)研究誌・広報誌『大学史紀要　紫紺の歴程』、史料集・史料論集『歴史編纂事務室報告』の刊行、(3)問い合わせ応対とレファレンス業務、(4)学内紙への定期執筆等について挙げた。しかし、そうした本務と同じくらい、あるいはそれ以上に学内の各部署・機関との関わりが急増していることを、開学記念碑建立パンフレットの編集・執筆（主管：企画部）、明治大学記念館さよならイベントの歴史展開催（主管：総務部）および『明治大学記念館 1928-1995』（主管：広報部）等々、法人関係について紹介した。さらに教学関係として1997年度から開講する学部間共通総合講座（1～3年生対象、2もしくは4単位、和泉校舎）の「日本近代史と明治大学」という授業について説明した。さらに近年、学外との交流もとみに深まっているとして創立者出身地における講演会・展覧会、あるいは各博物館との共同調査を例にひいた。

要は一定の業務、ひとつの分野だけでは「大学史」はおさまりきれなくなってきているということである。

大学史の深まり

ここでいう「大学史の深まり」とは研究上の深化をさす。この項目は、当日、扱う余裕があまりなかった。しかし、前述「大学史の広がり」とは一体をなす重要な事柄であるのでここに特記しておきたい（詳細は後日に記したい）。

実は最近、問い合わせの応対に忙殺される毎日である。このことは当明治大学のことだけではないと思われる。しかし、逆にみればそれだけ「大学史」の需要が増していることである。しかも、直接にわれわれの大学史担当部署にみえたり、電話や手紙をよこされる（つまり例えば大学代表電話から転送されるということではなく）ケースが増している。このことはスタッフの気持ちを前向きにしてくれることでもある。

ところで、当明治大学歴史編纂事務室では初年度の『歴史編纂事務室報告』（前記）は明治大学記念館について、次年度のそれは明治大学の学則についてを特集した。このようなテーマを取り上げた、その背景と経緯には次のようなことも関係している。正直なところ、先に述べた多くの問い合わせ、調査依頼、あるいは業務委託に対して刊行済みの『明治大学百年史』だけでは十分には応えられない。それはもちろん百年の歴史を限られた分量の中に収めきれないというスペース上の都合がある。しかし、それだけではない。学内の食堂、制服・制帽、運動場、学園祭、教室および授業のようす等々の新しいテーマ。これからの大学史研究、大学史編纂は単に過去の史料を古い順（時系列）に並べるだけではなく、空間とか現場にも視野を広げていかねばならないことを示唆している。それだからこそ前項で強調した「大学史の広がり」は重要なことである。なお、こうした社会的、教育学問的な要請をうけて『明治大学歴史編纂事務室報告』の特集を組んだつもりであるが、不備・不足が多いことも認める。

以上、本稿では「大学史の広がり」ということを中心に、さらに「大学史の深まり」ということにも及んだが、それがひいては「大学史の高まり」という段階に到達できるひとつの方途と思っている。

最後に本研修に協力をいただいた三浦節夫氏、桑尾光太郎氏をはじめ、会員皆様に感謝するとともに、再び自力研修会が開設されることを願っている。

1997年7月10日(木)　研究部会

北米の市立文書館を見て

藤沢市文書館　細　井　　守

現在、日本には大小さまざまな文書館施設が存在しますが、いずれも千差万別。自館の進むべき道をどこに求めたら良いのか、そろそろ考えるべき時期だと思っています。

幸い市の海外派遣研修で北米にあるいくつかの文書館施設を訪問する機会を得ました。自治体文書館という一つのジャンルの話題ですが、大学アーカイブズの今後の活動にとって、僅かなりとも参考になれば幸いです。

研修に当たって訪問地の選択をしましたが、その過程で判ったことは「北米なら何処にでもarchivesがあるわけではない」ということです。当たり前のような話ですが、私の頭の中では「北米全ての都市には文書館・博物館・図書館が揃っている」はずでした。比較的archivesが充実していたのは、東海岸地域と今回訪問した五大湖周辺地域のようです。

さて、今回の私の研修旅行は、ワシントンD.C.（USA）→ウィンザー市（カナダ）→ロチェスター市（USA）→ニューヨーク市（USA）といった経路でしたが、メインは間の2市での市立規模機関の訪問でした。

従来、北米の文書館施設に関する紹介も少なくはないのですが、大規模館に関するものが中心で、「進んだアメリカと途上の日本」という図式の下で、中小規模館に勤める立場にとっては、あまり具体的なイメージが掴めずにいました。それで今回の訪問では、意識的に中小（公）文書館に的を絞りました。

一つ目のウィンザー市は私の勤める藤沢市と姉妹都市関係にあり、人口規模は藤沢の方が大きいのですが、文化施設面等ではウィンザー市の方がかなり勝っていました。

二つ目のロチェスター市は、現地訪問時にお世話になった小川千代子さん（国際資料研究所）の米国でのネットワークのお陰で、訪問の段取りが付き、実現したものです。

2市の（公）文書館施設の概要を以下に掲げ、若干の感想を述べさせていただきます。

■ウィンザー市（カナダ、オンタリオ州）

人口　約20万人（年々減少傾向にある）

面積　12万8千㎡

特徴　リゾート地域であるが、カナダ第5位の工業都市

市職員数　2,342人

◎ウィンザー市文書館（Municipal Archives）

設立　1983年（1984年開館）

組織　市評議会（City Council）の直属組織である公共図書館（統合）委員会（Windsor Public Library）の一部門。（教育委員会所属の感じ）

人員　館長1名（女性）：アーキビスト、図書館情報学系の大学院卒。専門職
セクレタリー（秘書）1名（女性）：コンピュータ担当。専門職
レコード・マネージャー1名（女性）：大学は政治学専攻。専門職
アルバイト（週2日）1名（女性）

所蔵資料　主に行政文書で、保存対象とされた文書（archives）を受け入れるが、他に地域の関連資料で行政文書の補完資料となるものについては受け入れ、保存・提供している。

所蔵量　利用可能なもの：1,800立法feet
整理中のもの：1,500立法feet

利用　・行政の利用者は5％程
・95％は、学生（Student）、地域歴史研究者（Local Historical Research）、住居建設予定調査者（Housing Research）ジニオロジスト（系図調査者／Genealogist）

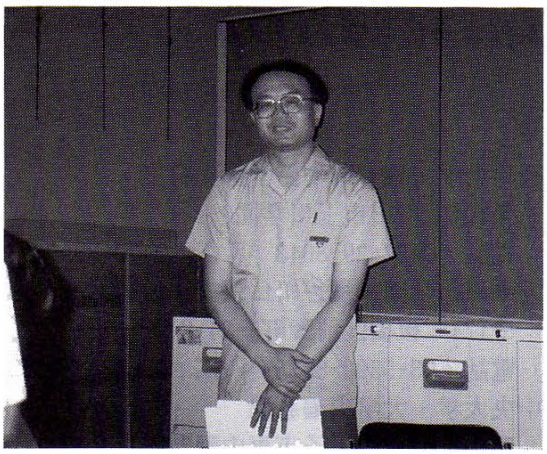
■ロチェスター市（アメリカ合衆国、ニューヨーク州）

人口　約23万人（年々減少傾向にある）

特徴　「Flower City」「World Image Center」（コダックの本社がある）

市職員数　約2,800人

◎ロチェスター市文書館・レコードセンター



報告する細井　守氏

(City Archives and Records Center)

設立　1989年から市長直属の財務局の管轄に入る（以前は市評議会管轄）

組織　市財務局（Finance Department）の局長室（Director's Office）直属

人員　館長（Record Management Coordinator）1名（男性）：アーキビスト、博士（歴史学）、専門職

副館長（Asistant Record Management Coordinator）1名（男性）：アーキビスト、オペレーション・マネージャー、専門職

マイクロ化プロジェクト担当1名（女性）：マイクロ・オペレーター、専門職

非常勤職員　2名

アルバイト　夏季：固定1名

所蔵資料　行政文書のみ

レコードセンターに搬入された行政文書が、archivesに選別されて文書館で保存される。

所蔵量　文書館保存のもの：1,500立法feet

写真多数：2万枚以上のネガと2万枚以上のプリント

利用　・利用者の多くはジニオロジスト（系図調査者）と地域の歴史研究者・資料の利用に付いて、ジニオロジストの組織や地域歴史協会（ヒストリカルソサエティ）と連携

・資料を地域のコミュニティが使えるよう宣伝（古い写真の展示など）

2施設とも大して規模は大きくなく、人員も少ない。人口37万を擁する自治体文書館職員の立場としては、正直ほっとしました。

しかしその反面、業務の流れや利用面での充実には目を見張るものがあります。その原因は、当方との基本的な違いによるものでした。

その違いを象徴する、印象に残った二つの言葉があります。一つは、ウィンザーの館長Ms.Linda Chakmakが、同僚の秘書を指して言った「彼女はそのまま館長には成れません」というものです。

これは能力の問題ではありません。秘書の女性も専門職ですが、アーキビストとしての専門教育（学位取得）を受けて承認されない限り、長いだけでは館長職（＝アーキビスト）には成れないということです。この差異こそが、館長（アーキビスト）が文書の移管・保存について市当局とやりあっていくだけの権威・権限を与えているのでしょう。アーキビストの存在基盤は技能だけではないようです。

もう一つは、私の自治体史編纂に関する質問に対して、ロチェスターの館長Dr.John Nobleが「何で（文書館で）地域の歴史をまとめる必要があるのですか？」と返答されたものです。市のarchivesはあくまで市の記録を保存・活用するところであり、市の組織変遷の歴史をまとめる気はあるが、地域のことは地域の歴史家がやるべきだというのです。

この言葉の背景には、地域や他団体との強固なネットワークの存在がありました。他の機関（例えば同じ市内の財団立美術館）でも聞いた話ですが、資料収集における一番の留意点は「他機関との重複を避ける」ことだそうです。ウインザーの文書館でも、市立大学文書館との重複を避ける点が強調されていました。それぞれの機関が明確な収集方針を持ち、お互いに利用しあっているのです。美術館で郡内の資料所蔵目録を拝見しましたが、そこには個人所有の「スクラップブック・コレクション　4冊」というものまで、細かに記されていました。

翻って当館を見るに、業務があまりにも多岐にわたっていることが気になり始めました。「文書館は何をするところか」改めて問い直す必要性を感じさせられた海外視察でした。

全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿

（1997年5月13日現在）

会員校・担当部課室

愛知大学・愛知大学50年史編纂委員会
〒441　豊橋市町畑町1-1
電話：0532-47-4138　FAX：0532-47-4132

学習院大学・学習院大学史料館
〒171　豊島区目白1-5-1
電話：03-3986-0221(内6569)
FAX：03-5992-9219

神奈川大学・大学資料編纂室
〒221　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
電話：045-481-5661(内2241)
FAX：045-481-9300

関東学院・学院史資料室
〒236　横浜市金沢区六浦町4834-1
電話：045-786-7049　FAX：045-786-0787

慶應義塾大学・福澤研究センター
〒108　港区三田2-15-45
電話：03-3453-4511（内2625）
FAX：03-3769-1564

國學院大學・校史資料室
〒150　渋谷区東4-10-28
電話：03-5466-0104　FAX：03-5485-0152

国際基督教大学・編年史室
〒181　三鷹市大沢3-10-2
電話：0422-33-3057　FAX：0422-33-3634

国士舘大学・国士舘資料室
〒154　世田谷区若林4-31-10 柴田会館4階
電話：03-5481-5340

実践女子大学・記念事業事務室
〒191　日野市大坂上4-1-1
電話：0425-85-0301　FAX：0425-85-0327

上智大学・史料室
〒102　千代田区紀尾井町7-1
電話：03-3238-3294　FAX：03-3238-3539

成蹊学園・総務部学園史料館事務室
〒180　武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
電話：0422-37-3517　FAX：0422-37-3868

専修大学・年史資料室
〒101　千代田区神田神保町3-8
電話：03-3265-5879　FAX：03-3265-5923

拓殖大学・創立百周年記念事務室
〒112　文京区小日向3-4-14
電話：03-3947-2261　FAX：03-3947-5333

玉川大学・教育博物館学園史料室
〒194　町田市玉川学園6-1-1
電話：0427-39-8643　FAX：0427-39-8654

大乗淑徳学園・長谷川仏教文化研究所
〒174　板橋区前野町5-24-8
電話：03-5392-8855　FAX：03-5392-8853

中央大学・大学史編纂課
〒192-03　八王子市東中野742-1
電話：0426-74-2132　FAX：0426-74-2148

津田塾大学・企画広報課
〒187　小平市津田町2-1-1
電話：0423-42-5113　FAX：0423-42-5121

東海大学・資料室
〒151　渋谷区富ヶ谷2-28-4
電話：03-3467-2211　FAX：03-3485-4962

東京基督教大学・歴史資料保存委員会
〒270-13　千葉県印旛郡印西町内野3丁目301-5-1
電話：0476-46-1131　FAX：0476-46-1405

東京経済大学・百年史編纂室
〒185　国分寺市南町1-7-34
電話：0423-28-7955　FAX：0423-28-5900

東京女子医科大学・史料室・吉岡彌生記念室
〒162　新宿区河田町8-1
電話：03-3353-8111(内22213)
FAX：03-5269-7402

東京農業大学・図書館
〒156　世田谷区桜ヶ丘1-1-1
電話：03-5477-2525(D1)
FAX：03-5477-2632

東北学院大学・広報室
〒980　仙台市青葉区土樋1丁目3-1
電話：022-264-6423　FAX：022-264-6458

東洋大学・井上円了記念学術センター
〒112　文京区白山5-28-20
電話：03-3945-7555　FAX：03-3945-7601

獨協学園・百年史編纂室
〒340　草加市学園町1-1
電話：0489-42-1111　FAX：0489-42-6756

日本工業大学・総務課
〒345　埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1
電話：0480-34-4111(代)FAX：0480-34-2941

日本女子大学・成瀬記念館
〒112　文京区目白台2-8-1
電話：03-3942-6187　FAX：03-3942-6182
日本大学・大学史編纂室
〒102　千代田区九段南4丁目8-24
電話：03-5275-8036　FAX：03-5275-8325
法政大学・総務部広報・広聴課
〒102　千代田区富士見2-17-1
電話：03-3264-9365　FAX：03-3264-9639
宮城学院女子大学・宮城学院資料室
〒981　仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1
電話：022-279-1311㈹ FAX：022-279-4707
武蔵学園・武蔵学園記念室
〒176　練馬区豊玉上1-26-1
電話：03-5984-3748　FAX：03-5984-3871
武蔵野美術大学・大学史史料室
〒187　小平市小川町1-736
電話：0423-41-5011　FAX：0423-42-6544
明治大学・総務部歴史編纂事務室
〒101　千代田区神田駿河台1-1
電話：03-3296-4085～6
FAX：03-3296-4086
立教大学・図書館大学史資料室
〒171　豊島区西池袋3-34-1
電話：03-3985-2693　FAX：03-3985-2819
立正大学学園・庶務部庶務課
〒141　品川区大崎4-2-16
電話：03-3492-5165　FAX：03-5487-3340
早稲田大学・大学史編集所
〒169-50　新宿区西早稲田1-6-1
電話：03-3232-5668　FAX：03-5286-1815

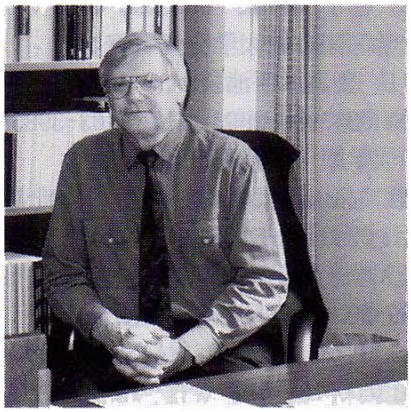
全国大学史資料協議会1997年度総会・全国研究会 10月に仙台市で開催

本協議会の1997年度総会および全国研究会が10月13日(月)から10月15日(水)まで、仙台市の東北大学、東北学院大学の両大学を会場に開催される。

13日(月)15時から東北大学金属材料研究所講堂で総会を開催、続いて開かれる講演会にはオーストラリア、シドニー大学アーキビストのケニス・スミス氏が講師として来日される。

講師のプロフィール、演題は次のとおり。

講師プロフィール



講　師

ケニス・スミス氏（Kenneth E. Smith）

演　題

「シドニー大学のアーカイヴズ
―過去、現在そして未来」

略　歴

1929年12月６日　英国に生まれる。

1958年11月まで父親とともに酪農に従事した後、オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズに移住。移住後10年間、酪農に従事した後、サウス・ウェールズ乳業㈱の本社役員となり、酪農業界の運営委員を務める。

1969年から1973年にかけて、シドニーのマクワーリ大学にまなび、翌74年文学士修得。その後、ニュー・サウス・ウェールズ大学の研究科に進み、75年にアーカイヴズ管理者の資格を取得。

その後、マクワーリ大学にもどって２年間オーストラリア史を学び、1976年優等生で卒業。

1975年、ニュー・サウス・ウェールズのウロンゴング大学アーキヴィストに採用される。

1976年、シドニー市議会のアーキヴィストに採用される。これは、オーストラリアにおける地方自治体アーキヴィストの第１号である。

1980年、シドニー大学アーキヴィストに採用される。この間、オーストラリア・アーキヴィスト協会のシドニー地区代表を務める。幹事や大学・短大分科会の代表を歴任。

1980年代にはオーストラリア・アーキヴィスト評議会の会長を務める。

趣　味

グルメ・ワイン好き

全国大学史資料協議会東日本部会
1997年度総会議事録（抄）

日　時　1997年5月13日(火)　15時～16時
会　場　神奈川大学横浜キャンパス
　　16号館1階視聴覚ホールB
出席校　23大学　3個人会員
　　オブザーバー　熊　　博毅氏
　　（関西大学・西日本部会事務局校）
　　計39名
開会の挨拶　神奈川大学　井上　　孟氏
　　（事務局次長兼広報部長）
議長の選出
　議　長　國學院大學　益井　邦夫氏
　副議長　国士舘大学　佐藤　芳朗氏
議　事　1．1996年度事業報告・同決算報告について（承認）
　　2．1997年度事業計画案・同予算案について（承認）
　　3．その他
閉会の挨拶　中央大学　　村松　良人氏
　　（大学史編纂課長）
懇　親　会　16時30分～18時　出席者　35名

全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録（抄）

第5回　1997年3月11日(火)
　　13時30～14時30分
会　場　中央大学駿河台記念館　580号室
出席校　神奈川大学　慶應義塾大学
　　國學院大學　中央大学　東海大学
　　日本大学　武蔵野美術大学
　　明治大学
　　中野　　実氏（東京大学大学史史料室）
議　事　(1) 1997年度の研究部会活動について
　　(2) 会報発行・パンフレット作成・記念誌編纂の件について
　　(3) その他
第6回　1997年4月23日(水)　13時30分～16時
会　場　中央大学駿河台記念館　500号室
出席校　神奈川大学　慶應義塾大学
　　國學院大學　玉川大学　中央大学
　　東海大学　東京農業大学
　　武蔵野美術大学　明治大学
　　中野　　実氏（東京大学大学史史料室）
議　事　(1) 1997年度の総会について
　　(2) 会報発行・パンフレット作成・記念誌編纂の件について
　　(3) その他
第7回　1977年5月13日(火)　13時～15時
会　場　神奈川大学横浜キャンパス
　　16号館1階視聴覚ホールA
出席校　神奈川大学　慶應義塾大学
　　國學院大學　玉川大学　中央大学
　　東海大学　東京農業大学
　　武蔵野美術大学　明治大学
　　中野　　実氏（東京大学大学史史料室）
　　熊　　博毅氏（関西大学出版部）
　　西口　　忠氏（桃山学院年史委員会）
議　事　(1) 1997年度部会総会準備作業について
　　(2) 1997年度の活動計画について
　　(3) その他
第8回　1997年7月10日(木)　14時～15時
会　場　藤沢市文書館　3F　会議室
出席校　神奈川大学　慶應義塾大学
　　玉川大学　中央大学　東海大学
　　日本大学　武蔵野美術大学
　　明治大学
議　事　(1) 1997年度の活動計画について
　　(2) その他

全国大学史資料協議会東日本部会
研究部会記録（抄）

第5回　1996年3月11日(火)　14時30分～17時
会　場　中央大学駿河台記念館　580号室
参加校　20大学　3個人会員　　30名
演　題　「大学史の広がり」
講　師　鈴木　秀幸氏
　　（明治大学総務部歴史編纂事務室）
　　三浦　節夫氏
　　（東洋大学井上円了記念学術センター）
　　桑尾光太郎氏（学習院大学史料館）
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した鈴木秀幸氏の報告をご参照ください。
第6回　1997年7月10日(木)　15時～17時
会　場　藤沢市文書館　3F　展示室
参加校　14大学　4個人会員　　24名
報　告　細井　　守氏（藤沢市文書館）
　　「北米の市立文書館を見て」
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した細井守氏の報告をご参照ください。

三二情報

※明治大学『大学史紀要 紫紺の歴程』、『事務室報告』刊行

このたび明治大学大学史料委員会および歴史編纂事務室より２つの冊子が刊行された。

ひとつは『大学史紀要　紫紺の歴程』創刊号である。これは従来の百年史編纂委員会、およびその紀要『明治大学史紀要』に代わるものであり、大学史料委員会が編集したものである。その内容は栗田総長の巻頭言にはじまり、「大学史の窓」という随想、「大学史と史料」と題した特集、戸沢学長を囲む座談会、学生日記の復刻等々である。

もうひとつは歴史編纂事務室が前年の記念館特集に続けて刊行した『歴史編纂事務室報告』第18集である。今年度はおもに大正期・大学昇格以降の明治大学における学則を取り扱った。その内容は学則および関係史料を紹介し、さらに歴史的意義について考察を加えたものである。

なお購入・問い合わせは両書とも明治大学総務部歴史編纂事務室（〒101　東京都千代田区神田駿河台1-1、03-3296-4085・4086）である。（明治大学総務部歴史編纂事務室）

※『日本大学百年史』第一巻刊行される

平成元年に創立百周年を迎え、その記念事業の一環として編纂を開始した『日本大学百年史』の第一巻が今年３月に刊行された。

『日本大学百年史』は全五巻を予定し、第一巻から第三巻までが本編で、第一巻は日本法律学校の創立期から専門学校令による大学期まで、第二巻は大学令による日本大学の発足から太平洋戦争期まで、第三巻は戦後の教育改革による新制日本大学の発足から現在までを記述する。また、第四巻は資料編、第五巻が年表・索引となる。

このたび刊行された第一巻は、序章・学祖山田顕義、第一編・日本法律学校時代、第二編・専門学校令の制定と日本大学、第三編・近代法体制の整備と日本法律学校の三編からなり、Ａ５判で総ページ数は1,016ページ。

※『早稲田大学百年史』第五巻刊行、全七巻完結

1962年の早稲田大学八十周年当時から準備され、1970年に設立された早稲田大学史編集所が編纂を進めてきた『早稲田大学百年史』の第五巻が３月に刊行され、全七巻（通史五巻、別巻<学部・付属機関等史>二巻）が完結した。

『早稲田大学百年史』は、最初に「稿本」を作成、関係者による検討を経た上で定本を作成するという編集方針をとり、1972年に『稿本早稲田大学百年史』第一巻（上）を刊行以来、四半世紀にわたって百年史の編纂を進めてきた。

このたび刊行された第五巻は通史の最終巻で、第十編・新制早稲田大学の本舞台、第十一編・近づく創立百周年、第十二編・第二世紀へ向かってからなり、戦後の新制大学への移行期から現在に至る早稲田大学の軌跡を記録したものである。Ａ５判、総ページ1,118ページ。

※『関西学院百年史』通史編Ⅰ刊行

今年５月、『関西学院百年史』の通史編Ⅰが刊行された。

関西学院では、創立百周年を迎えた1989年から記念事業の一環として正史編纂の取り組みを開始、すでに「資料編Ⅰ」、「資料編Ⅱ」が刊行されている。「通史編」は二巻構成で、このたび刊行された「通史編Ⅰ」は、関西学院の創立から、1945年の太平洋戦争終結時までを取り扱っており、第１章・関西学院創立前夜、第２章・関西学院創立、第３章・専門学校設立、第４章・大学昇格運動と上ヶ原移転、第５章・大学設立、第６章・太平洋戦争と関西学院からなる。Ａ５判、654ページ。

（以上３点の紹介は、本会報編集担当者）

ご案内

全国大学史資料協議会及び同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記事務局へご連絡ください。

〈事務局〉

中央大学広報部大学史編纂課
〒192-03　東京都八王子市東中野742－1
☎　0426－74－2132

会報編集担当

神奈川大学大学資料編纂室
〒221　横浜市神奈川区六角橋3－27－1
☎　045－481－5661

東海大学資料室
〒151　渋谷区富ヶ谷2－28－4
☎　03－3467－2211

中野　　実（東京大学大学史史料室）
〒113　文京区本郷7－3－1
☎　03－3812－2111